黒衣の男

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒衣の男

【Nコード】

N1891F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

都市伝説にある黒衣の男。この男の存在を信じた二人の少年の人生は。都市伝説の真相はえてしてこんなものであります。

第一章

黒衣の男

昔から言われている話がある。所謂都市伝説だ。

「だからな。俺達みたいな人間はだ」

「狙われているっていつのかよ」

「そうだよ、その通りだ」

壁には一面宇宙人やUFOの写真、中にはこんなものはまず有り得ないだろうという奇怪な姿の宇宙人の模写まである。

机や本棚には宇宙人やUFOの本、そうした小説まである。模型もあればフィギュアもある。そのフィギュアがまた異様で肌は黄色くスキンヘッドでその頭が異常に大きく吊り上がった目もまた不自然に巨大だ。時々テレビでアメリカ軍が接触したと騒がれるその宇宙人だ。

「UFOや宇宙人について詳しく研究している人間をな」

「狙っているのか」

「ああ」

やたらと度の深い眼鏡に白いものが僅かに見られる長めの髪の毛の少年が向かいにいる少し歯が出た口の大きな少年に答えたのだった。

「国家機密だぜ」

「国家機密っておい」

「アメリカ軍が隠しているんだ」

眼鏡の少年の言葉がさらに緊張したものになる。

「日本の自衛隊じゃないんだぜ」

「そりゃ自衛隊だったらな」

口の広い少年も自衛隊と聞いて少し気を抜かせたようであった。

「怖くとも何ともないな」

「やっぱりそうか」

「あんなの本当に怖くない」

それだけ自衛隊が国民から軽く見られているということだろうか。ひよっとしたらある特撮映画でいつも怪獣にこれ以上はないという程負けていることが影響しているのだろうか。

「全然な」

「けれどアメリカ軍だったらどうだ？」

「やっぱり怖いな」

「そしてこうなる。」

「あの連中はな」

「だからな。洲崎」

眼鏡の少年はここで向かいの少年の名前を呼んだ。

「何だよ川口」

「そういうことなんだよ」

彼もまた名前を呼ばれてそれに応えたのだった。

「あの連中ならそれをやる」

「UFOについて細かく調べている人間を狙う」

「俺も御前も」

真剣な顔で洲崎に対して告げた。

「狙われているぞ。注意しろよ」

「その連中にか」

「もう一度言っぞ」

真顔でまた洲崎に告げる。

「マン＝イン＝ブラック」

「黒衣の男か」

「そう、黒衣の男」

この名が繰り返される。

「この連中には注意しろよ」

「葬式みたいな黒いスーツで黒いソフト帽か」

「いつもその格好だ」

かなり目立つ格好ではある。まず街を歩いていけば不審者と思われる格好だ。

「その格好で一人、若しくは何人かで歩き」

「俺達みたいな人間を狙っている」

「そして隙を見せれば」

語る川口の顔の緊張が頂点にまでなる。

「捕まるぞ」

「捕まっつてどうなるんだ？」

「消される」

剣呑な言葉が出された。

「人知れずな。行方不明になった奴も何人もいるらしい」

「何人もっつておい」

「隣の町の大学生の人が消えたらしい」

「何っ!？」

隣の町といういい具合に身近な場所の話なので洲崎も注目したのだった。

「それは本当か!？」

「本当らしいぞ。三日前にな」

「三日前に……………」

「アパートの周りにその黒衣の男が何人か出て来て」

「消えたか」

「いきなり消えたらしい」

強張った顔で洲崎に語る川口だった。

「いきなりな。煙みたいにな」

「マジかよ」

「実際に黒衣の男を見た人がいるんだ」

話がさらに信憑性を帯びたものになる。少なくとも彼等の間ではそっとなっつてきていた。

「何人もな」

「何人も……………」

「だから洲崎」

真剣そのものの顔で洲崎に対して言う。

「気をつける」

「俺もか」

「当然俺もだ」

川口の顔は強張る一方であった。

「何時何処で奴等に何をされるかわからないぞ」

「下手したらさらわれてか」

「アメリカ軍に洗脳されるかも知れない」

「洗脳……」

「下手に殺してもまずいだろう？」

何故かこの言葉は妙な現実味があった。と二人には考えられたのだった。二人で話し込んでいると自然にこうなってしまうていくのだろうか。

「俺達みたいな人間でも」

「けれど事故に見せかけられることもできるよな」

「それもあるか」

「あるだろ、普通に」

今度は洲崎が川口に対して語るのだった。

「そうしたこと。事故だったらわからないしな」

「どっちにしても気をつけないといけないのか」

「そうみたいだな。じゃあやっぱり」

「とにかく気をつけよう」

「ああ」

お互いの顔を見て頷き合う。二人は本当に真剣そのものだった。

「街を歩く時でも学校でもな」

「家にいる時でもな」

こうして二人は常に周囲を警戒するようになった。登下校の時は勿論家にいる時も学校にいる時もだ。常に周囲を警戒し緊張した顔になっていた。

第二章

「おい、あそこ」

「ああ、やばいな」

川口は洲崎が指差した先を見て顔を強張らせていた。見ればそこではお葬式が行われていた。

「黒い服の連中が一杯いるな」

「それにだ。見ろ」

「………いる」

黒い帽子を被った者もいたのだ。

「あれは間違いないぞ」

「黒衣の男だ」

「おい」

今度は川口が洲崎に声をかけた。その強張った顔と声で。

「俺達の方を見ているぞ」

「そうだな。気付いた!?!」

「気付いたんじゃない」

川口はそれをすぐに否定した。

「見ているんだ、最初からな」

「最初からか」

「ああ、見ている」

川口のその言葉は確信だった。その葬式の場所を見て言葉を続け
ていく。

「俺達のがはつきりわかっているんだ、絶対に」

「逃げるか!?!」

「ああ、逃げよう」

ここで顔を見合わせて言い合った。

「だが。そのまま逃げてもすぐに捕まるな」

「じゃあどうするんだ?」

「二手に分かれるぞ」

川口はもう完全に何かの映画の中に入っていた。

「俺は右、御前は左か」

「左右に別れるんだな」

「携帯で連絡を取り合ってたな」

「声は出さないでだな」

「当然だ」

話せば話す程勝手にシリアスになっていく。ただしそのシリアスは何かのスパイ映画そっくりであるが勝手に二人の中で盛り上がっている類のものだった。二人は気付いていないが。

「いいな。それでな」

「わかった」

洲崎は川口のその言葉に静かに頷いた。

「じゃあそれで行こう。落ち合う場所は」

「公園だ。そこでな」

「よし。行こう」

「すぐにな」

言葉通り左右に散って小道に入り茂みの中に入るとにかく普通は通らない道を通って二人は逃げた。時折後ろを見つつだ。彼等は確かに見ていた。

「おい、そっちはどうだ？」

「来ている」

洲崎は林の中をジグザグに進みながら後ろを振り向きつつ川口のメールに返信を送っていた。声を出しては駄目なのでメールでやり取りをしているのだ。

「一人、いや二人いるな」

「二人か、そっちは」

「御前の所は何人だ？」

「三人だ」

川口はこう返信した。商店街の裏側を進む彼もまた後ろを必死に

見ていた。

『来ている。間違いない』

『逃げられるか？』

『逃げる』

川口の強い決意だった。

『だから御前も逃げろ。いいな』

『わかった。何とか捲く』

悲壮感漂う洲崎の返信だった。

『何とかな』

『公園で会おう』

川口はこう返信してそれから必死に商店街の裏側を駆けていった。何とどぶ河にまで降りそこまで駆けた。洲崎は洲崎で山に一旦行ったりした。そうしながら何とか公園まで辿り着いて二人は汗だらけになった顔で再会したのだった。もう必死だったのが嫌になる程わかる。

「逃げられたな」

「何とかな」

お互いの汗だらけの顔を見合って言葉を交えさせていた。

「逃げられたな」

「ああ。しかし」

洲崎は恐れを見る顔で川口に述べたのだった。

「本当にいたんだな、黒衣の男」

「俺が言った通りだろう？」

「全くだ」

肩で息をしつつ川口に答える。

「まさかと思っただけだな」

「連中、また来るぞ」

川口はこつも言った。

「すぐにな」

「すぐか」

「アメリカ軍だぞ」

無茶苦茶なまでに説得力のある言葉に聞こえた。二人の中では。

「そう簡単に諦める筈がないだろう？」

「じゃあこれからもか」

「負けてたまるか」

川口の顔も言葉も必死なものになっていた。

「俺は生きる」

そして言うのだった。

「生きて戦う。何があってもな」

「俺もだ」

洲崎もそれに乗った。

「何があってもあいつ等に勝つ、いいな」

「ああ、何があってもな」

これが彼等の運命を決定した瞬間だった。この日より彼等はその黒衣の男達の妨害や追跡、監視をかい潜りながらUFO及び宇宙人の研究を続けていった。そして長じて彼等はそういったものに対する本を次々と出しテレビにも出るようになった。そこで高らかに主張した。

第三章

「あいつ等は確かにいます！」

「この地球に！」

この日ゴールデンタイムで宇宙人の特集をやっていた。二人はその番組にUFO研究者という肩書きで呼ばれその席で高らかに叫んでいたのである。

「アメリカ軍があいつ等を匿っているのです！」

「宇宙人との密約です！」

「密約なのですか」

極端に熱く語る二人に対して司会者が恐る恐る尋ねる。彼は普通のテレビ局のアナウンサーだ。つまり常識の世界の人間である。

「アメリカ軍がそんなことを」

「これは御聞きになられたことがありますね」

「ええ、まあ」

川口の眼鏡の向こうの血走った目に押されながら答えた。

「何かの本で」

「そう、それです」

「告発は過去何度も為されました」

今度は洲崎が真顔で発言する。

「ですがそれはその度に消されてきました」

「何故だと思われませんか？」

「さて」

司会者は首を傾げるだけだった。周りのゲスト達も完全に二人の言葉と勢いの為に空気になってしまっている。視聴者はネットである意味大騒ぎの有様を見せていた。

『おいおい、この二人凄いな』

『マジで言ってるよおい』

こう言って騒いでいたのだ。ネットで。

「本気つてのが凄いな」

「凄いつてもものじゃないぞ」

なお二人の話はネットでは誰も本気にしていない。

「これでノストラダムスって言ったら本物だな」

「まさかと思うがな」

流石にそれはなかった。ノストラダムスは二人にとって全く関係のない世界だったからだ。しかしであった。二人の発言はなおも続いていた。

「黒衣の男を御存知ですか」

川口は真顔で周りに対して語りだした。

「黒衣の男!？」

「そうです。黒いスーツに帽子の男」

今彼の頭の中にはその男達の姿がはつきりと映し出されていた。そしてそれをそのまま周りに対して話し続けていたのである。

「その男達です」

「UFOや宇宙人について調べていますと」

タイムニングよく洲崎がまた話す。

「その人間を監視し、隙あらば拉致洗脳しようとする者達です」

「それは尋常ではないですね」

司会者もそれを聞いて一応はこう述べた。

「拉致洗脳とは。まるでカルト教団じゃないですか」

「カルトより恐ろしいです」

洲崎は本気でこう語った。

「そんな甘いものではありません」

「甘いものではありませんか」

「私達はですね」

高校の時の原風景が蘇る。あの時のことが。

「彼等に追われたことがあります」

「それも何度も」

「何度もですか」

「そうです」

「これは確かです」

だがこの発言もまたネットでは失笑で迎えられたのであった。

『本当かね』

『連中の頭の中じゃそうなんだろう』

『じゃあお花畑か』

『メンヘルだな』

そういうことにされてしまった。しかし当然ながら二人はその様なことを知る由もない。それどころか発言をさらにヒートアップさせてさえた。

「彼等はですね」

「いつも私達を監視しています」

川口、洲崎の絶妙のコンビネーションであった。

「隙を見せたらすぐに迫り」

「何もなくともいつも家の周りにも潜んでいます」

「それは何故ですか？」

あまりにも熱く語る二人に対して司会者は戸惑いながらも真顔で問うた。

「その様にしてまで御二人を」

「決まっています」

川口はその司会者の問いに即答で返した。

「もうそれはわかっているのです」

「わかっていますか」

「私達は彼等についてよく知っています」

「その正体についても」

洲崎が正体について言及したのである。

「もうわかっているのです」

「何者かは」

「それではですね」

あまりにも健気な司会者の問い掛けであった。少なくともこの番

組はもう彼の力量にかかっていた。ネットでもそれは絶賛されていた。

『この人凄いな』

『そうだな、必死に番組をやってるぞ』

『頑張れ』

最早他のゲストは問題ではなかった。二人と司会者のみが注目されていた。だが二人はそんなことは全く知らず尚も己の話が続けるのだった。

「CIAです」

「そしてFBIです」

洲崎の後に川口が続く。やはり絶妙のコンビネーションだ。いいか悪いかの問題では最早なかった。

「それが黒衣の男の正体なのです」

「つまり彼等はですね」

完全に決め付けたうえでの話が続けられていく。

「アメリカ軍、つまりアメリカ政府の国家機密であるUFO及び宇宙人の秘密を探られたくない為に」

「それを調べている人間を監視しているのです」

「FBIまでもですか」

「そうです」

ここで二人は大きな矛盾に気付いていなかった。FBIはあくまで『アメリカ連邦警察』なのだ。有名な組織であるがあくまでこうなのだ。

「弾圧に参加しています」

「統制に」

「何故なら」

彼等なりの根拠がまた話される。

「皆さん、FBIの初代長官を御存知でしょうか」

「彼を」

二人で真顔で語るのだった。

「ええと、確か」

これに応えて彼等の他のゲストが口を開く。実は今まで話すことができなかったのだ。なぜならずっと二人の独演会状態だったからである。

第四章

「フーバーでしたっけ。半世紀は長官やっていたよなね」

「そう、その男です」

「その男こそは」

フーバー本人が聞いたら思わず頭と腰が逆さまになってします、
そこまでいった言葉になってしまっていた。

「アメリカ合衆国の影の権力者」

「全ての黒幕」

実際にフーバーという男が権勢を誇ったのは事実である。半世紀の間FBIの長官として君臨し歴代大統領の弱みを握っている為大統領も彼を辞めさせることができなかったのだ。こうした怪物を思わせるような人物は時折歴史に登場したりするものである。

「その彼がはじめたことでもあるのです」

「CIAだけでなくですか」

「その通りです」

「だから恐ろしいのです」

脳内補完した話が続けられていく。

「アメリカで恐怖の存在と恐れられてきた彼が進めてきたこと」

「だからこそ」

なおフーバーは一九七二年に死んでいる。言うまでもなく彼等が生まれる遙か以前だ。FBIの中にも彼を知る者はもう殆どいない。

「恐ろしいのです」

「私達の様な人間を次々と狙っていつているのです」

「そうだったのですか」

司会者は信じているような顔をしたいがどうしてもそれができないでいる非常に苦しい顔になって二人に対して言葉を返していた。

「それで御二人は狙われているのですね」

「その通りです」

「もう十年以上も」

つまり十年も信じ込んでいるのである。

「ですがです」

「それでもです」

しかもここでまた言う。

「何かありますか？」

「あります」

「今こそ言いましょう」

司会者に応える形でまた発言した。

「私達は負けません！」

「降伏もしません！」

テレビカメラを前にして叫ぶ。

「私達は何があるうとも！」

「彼等の弾圧にも妨害にも屈しません！」

何時しか崇高な目的の為に戦う戦士になっていたのであった。あくまで自分達を邪魔して狙っている存在がいると思っ

た。

「例え彼等が国家権力を駆使しようとも！」

「謎の委員会が後ろにいようとも！」

陰謀論まで出て来た。元々黒衣の男という存在が陰謀論から生まれたことであるからこれに至るのは至極当然であると言えた。

「屈することはありません！」

「必ずや彼等にうち勝ってみせます！」

「おお、それは素晴らしい」

司会者はその熱意だけは認めた。それだけは。

「ではこれからも頑張ってください」

「はい！そしてUFOと宇宙人の謎を解き明かしてみせます！」

「絶対に！」

「有り難うございました！」

ここで番組は終わった。まずは視聴率もよく番組としては成功な

のだった。ネットでも新たな人材が生まれ出たとして話題になっていた。

『世紀の奇人誕生!』

『今度は二人だ!』

『ミステルヤオイの後継者!』

『キバヤシ二世!』

こんな煽り文句があちこちのサイトやブログで乱舞した。つまり彼等もその主張もそうした類のものだと思われたのである。

ところが彼等は。全くそうは思わないのだった。

「やったな」

「ああ」

打ち合わせの喫茶店で。顔を見合わせてこの前のテレビのことを振り返りついでに打ち合わせをしていた。

「俺達の主張が伝わったぞ」

「皆わかってくれたんだ」

川口も洲崎も互いの顔を見合って熱い言葉を出していた。

「黒衣の男はいる」

「そして俺達を狙っている」

このことは彼等にとって絶対だったのだ。

「しかし俺達は負けない」

「何があるうとも」

次に固い決意を誓い合う。

「UFOの、宇宙人の謎を解き明かすぞ」

「黒衣の男が何だ」

「あんな奴等に俺達の目的を邪魔させはしないぞ」

「例え何をしてこようとも」

なお二人は街の喫茶店のど真ん中で話をしている。店員も客もどん引きしているが当然ながらそんなことは全く目にも耳にも入っていないのであった。

「負けはしないぞ」

「最後に勝つのは俺達だ」

完全に勝ち負けで考えていた。

「今度書く本はだ」

「ああ」

今度は本の話になっていた。二人はUFO研究者でありその収入は印税と自分達のサイトやブログでのアフィリエイトとなっている。とりあえず食べるのには駒ってはいない。

「アメリカに不時着したあれだ」

「リトルグレイだな」

「そう、あれだ」

あまりにも有名な宇宙人である。

「あれの秘密を徹底解剖していこう」

「そうだな。思えばだ」

二人は完全に自分達の世界に入り込んでいた。本当に完全に周りには見えていなかったのであった。誰がいるのかさえ気付いてはいなかった。

「不思議な話だ。あそこに宇宙人が降り立った」

「ああ」

「そこに住んでいた人間はどうなった？」

川口は真顔で洲崎に問う。

「近辺には家があった筈だな」

「どうもあの事件の後口封じをされたうえで強制的に移住させられたらしいな」

洲崎はこう答えた。

「どうやらな」

「移住か」

「そういうことになっている」

こう言ってしまうは何とでも解釈できるのであった。言葉は実に使い方によって様々な解釈ができる。

「しかしだ。彼等がそうなくても」

「わかつている。俺達は別だ」

川口は洲崎の言葉に固い決意で頷くだけだった。

「何があるうとも俺達は敗れはしない」

「決して。そうだな！」

「ああ、莫逆の友よ！」

「何処までも戦うのだ！」

またしても決意を確かめ合う。二人の周りにいる客達も店員さん達も皆啞然とするだけだ。その彼等は気付いていなかった。そこにその黒衣の男はいないということ。果たして黒衣の男が何者か、二人に対してどう思っているのか、そして本当にいるのかどうかは誰にもわからない。しかし一つだけ確かなことが言える。彼等は十年以上もこれだけ騒いでいても誰も捕まえたりしていないということだ。二人だけが気付いていないことであつた。

黒衣の男 完

2008・8・13

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1891f/>

黒衣の男

2010年10月8日15時04分発行